神奈川県立歴史博物館
Kanagawa Prefectural Museum of Cultural History

論題	神奈川県下にみられる盆の砂盛り習俗について
著者	鈴木通大
掲載誌	神奈川県立博物館研究報告―人文科学―　第 18 号
ISSN	0910-9730
刊行年月	1992 年（平成 4 年）3 月
判型	JIS-B5（182mm × 257mm）

神奈川県下にみられる
盆の砂盛り習俗について

鈴木　通大

はじめに

神奈川県下を代表する民俗のひとつに「砂盛り」習俗があり、分布図からもわかるように県北部および三浦半島を除いて県下の各地に広く分布している。また、この習俗の形態は概ね次の通りである。

各家では、毎年、盆の一三日になると屋内につくる盆棚とは別に、屋敷の入り口や屋敷前の道路をはさんだ反対側の道端に三、四〇センチメートル四方で、高さが二、三〇センチメートルぐらいに土や砂などで盛り固めた土壇あるいは砂山をつくり、さらにその土壇や砂山の上に線香を立てたり、花を挿した竹筒を立てたりして、しかもこの傍らで迎え火や送り火を焚いているのが一般的な形態である。

砂盛りとは、この土壇や砂山のことをいい、一般的にはスナモリ、モリヅカ、ツカ、ツジ、ボンヤマなどといろいろな名称で呼ばれているが、なかには名称や呼称がない地域も少なくない。そこで、ここではこの土壇や砂山の総称として「砂盛り」という名称を用いることにして、呼称があるものについては片仮名で表示して、なるべく両者の関係が混乱しないように留意した。

ところで、この砂盛りについては今までにも多くの研究者が論及してきているが、いまだに不明な点が少なくない。とくに、なんのために作られたのか、いつ頃に作られたのか、どういう意味があるのか、などという基本的な問題がいまだに解明されてないのが研究の現況であろう。

そこで、今回はこの砂盛りの習俗について、その研究成果を概観するとともに各事例を分析し、若干の考察を試みたいと考えている。

一、問題の所在

神奈川県下の民俗の中で、盆の砂盛りに関しては、かなり多く取りあげられているがまとまっているものが実に少ない。このことは、おそらく分析が可能な資料が量的・質的に少なく、また現地調査においても疑問に対して明確な回答をあたえてくれるような話者が見あたらないことも原因のひとつになっているのだろう。そうした状況の中で、とりわけ小林梅次氏や田中宣一氏の業績が目につく程度であり、今日における砂盛りの研究では貴重な成果となっているといえるだろう。同時に、このことはその後の研究が停滞していることを如実に物語っている。したがって、ここでは両氏の成果を取りあげ、その概要を紹介したい。

小林氏は、「相模のツジと盆」[1]という論考の中で、砂盛りを足柄上郡に多くみられた盆柱と比較しながら、その意義を探っている。盆柱というのは、承知されている方も多いと思うが水棚とか茶湯棚とも呼ばれ、盆になると庭先に四本の篠竹を立て、その上方に竹で編んだ棚をこしらえ、縁の部分を杉の葉で被う。棚の上には器に入った水が供えられる。多くは新盆の家で作られ、このそばで火が焚かれることが砂盛りと同じである。この点に着目して、小林氏は砂盛りと盆柱を比較したわけである。さらに、ツジの名称についても論及しているが、砂盛りについて十分に解明されたとはいえない。

また、小林氏は、その後に発表した「盆行事の研究」[2]という論考で、「ここにおいてまた残る問題は、盆のツカが祭場であり、祖霊より一段と冷遇される無縁とか、新精霊の祭場らしいことは述べたのであるが、そのそばで冷遇されなくてもよいはずの祖霊のための迎え火送り火と称せられているものをどうしてたくのかということが疑問である」としながらも、「盆祭に仏壇をかざるのは、もとは盆のたびに祭壇を新設したなごりであって、藤沢市内でも、盆には位牌を仏壇から出して新設した仮の祭壇に並べる例のあるのは、右のような意味で、古風な祭の形式なのである。盆のツカも同様な意味で臨時の祭壇で古い形式の祭壇ということができる。これが無縁仏だとか餓鬼仏などを祭ると解するのは、やはり後世のからの付会であって、もとの意味が忘れてからの結果かも知れないのである」と指摘している。いずれにしても、小林氏は砂盛りが臨時の祭場で古い形式の祭場であると考えている。

田中氏は、『神奈川県史　民俗編』[3]の中で盆の砂盛りを本格的に取りあげ、とくに分布、各地の事例、意味について論及している。この論考の中で、「県下で砂盛りをつくらない所はただ砂盛りを作らないというだけであって、門口で火を焚いて先祖の霊を送迎することは砂盛りを作る所とほとんど同じである。したがって、これが先祖の霊を迎えるための欠くべからざる祭壇でないことも事実なのである」と指摘し、さらに「先祖の霊を迎え祀るにあたって、屋外に臨時の祭場を設けるということじたいは古い方式である。しかし砂盛りという土壇を築く風習そのものは、はたして古いといえるかどうか疑問である。分布状態からみて、ある種の宗教者の関与があったものかとも思われるが、明かではない」と結んでいる。田中氏は屋外に臨時の祭場を設けることが古い方式であると認めながらも、即座にそれと関連させて砂盛りの習俗が古い方式であるとはいえないとしている。また、今の段階では論証ができないが、砂盛り習俗にある種の宗教者の関与があったのではないかと示唆しているが、この点も今後の課題として注意しておきたい。

二、砂盛りの諸相

ここでは、県下にあらわれた砂盛りの事例について、今後の研究

「砂盛り」習俗の分布図

にも役立つようにつとめて多くの事例を紹介する。

事例①　横浜市旭区上白根[4]　川の砂でオボンサマのツカをよく作る。ツカはムカイヅカといった。ツカには細い竹の花立を立て、一三日の夕方、ツカの前でワラを焚く。

事例②　川崎市高津区末長・久末・千年・子母口[5]　盆は八月一三日から一六日まで。家の門口に砂盛りといって、三〇センチメートル四方位の土壇をきずいて、その前で迎え火をたく。

事例③　相模原市磯部・新戸[6]　迎え火は一三日夕方宵盆にたく。一家そろって門口につくっておいたお砂盛りに行って藁でたくのである。送り火も同じところでたくのであるが、一五日か一六日早朝という家もある。ともに茄子・胡瓜でつくった馬を持って行き、送り火には団子をつくってアライアゲと共に供える。お砂盛りは三〇〜四〇センチメートル四方で、高さ一〇〜一五センチメートル位で土を盛り、指で線香立ての穴をあけ、または新竹を切ってこれをつくる。オスナモリまたはツカと呼んでいる。

事例④　大和市草柳[7]　八月一三日の夕方に先祖が帰って来るというので、門前に砂で塚を作り、そのそばで、迎え火をオガラなどを燃やして焚く。砂の塚は、三〇センチメートル四方の塚で、塚の回り

にはツエといって、オガラを立てたり、オガラで鳥居の形を作って立てる。

事例⑤　大和市下鶴間[8]　家によっては、砂盛りといって、砂で三〇センチメートル四方の塚を作り、その四隅にオガラを立てることもある。その砂盛りの上に茄子などで作った牛馬や線香を立てて置く。この砂盛りは送り火を焚くまで、盆の期間はそのままにしておく。

事例⑥　座間市四ツ谷・新田宿・栗原[9]　門口に「すなもり」などと呼ぶ壇を作る。土または砂で、三〇センチメートル四方、高さ一〇センチメートルほどの、上部の平らな小さい塚である。四隅と中央に指で穴を開けるか、適当な太さの竹筒をさし、線香立とする。正面に階段をつける家もある。（中略）戻ってくると門口の「すなもり」の傍らに馬を置き、ここで藁をまた燃やし、線香に火をつけ、「すなもり」の穴に立てる。その線香を一本盆棚の線香立てに立てるなり、その火でローソクをともして盆棚へ移し、馬を盆棚へ持って行く。そして、はじめて祖先たちの霊が迎えられたことになる。

事例⑦　海老名市国分[10]　門の入り口に土を盛り、若竹を切って、節を中心にあるように一五～二〇センチメートルにしたものを線香立てとし、土盛りに立てる。スナモリという。

事例⑧　綾瀬市上土棚[11]　一三日の夕方、門口に作った土盛りの所で迎え火をたく。ナスとキュウリに足となるオガラをさして牛と馬を作り、土盛りの前に頭を向けて置く。そして麦カラをパチパチ燃して、先祖の霊を迎える。その火を線香に移し、数本は土盛りの上に立て、数本はナス・キュウリの牛馬とともに座敷のオショロサマの棚にのせる。

事例⑨　藤沢市打戻[12]　一三日昼、門口に畑の土でお精霊様を迎えるための砂盛り（オショロヅカ）を作る。その砂盛りの上に茄子で作った馬をのせておき、夕方迎え火を焚いてからその馬を持って家に入り、盆棚にかざる。

事例⑩　茅ヶ崎市堤[13]　一三日はヨイボンという。迎え火をたき、ナスとキュウリで馬をつくり、門のところに土を四角に盛ってオガラ（麻のカラ）をまわりにさし、その上に家の方向にむけて馬をおく。

事例⑪　茅ヶ崎市柳島[14]　墓に迎えにいく前に、門口に砂盛りをする家もあった。一尺四方、高さ五寸ぐらいに砂を盛って、造花の蓮などを飾る。

事例⑫　厚木市上古沢[15]　一三日にツカ（砂盛り）をつくる。男の仕事で、川のベタベタした土でつくる。竹は三本立て前に二本線香、

後ろ一本にコーハと造花を立てる。ムカエ火は、ムギカラをツカの前で燃やす。

事例⑬　伊勢原市石田[16]　ジョウグチにスナモリ（スナヤマともいう）を作る。一尺四方で高さ五寸ぐらいの台状に砂を盛り前方にオガラで段をつける場合もある。

事例⑭　伊勢原市下平間[17]　ジョウグチ（屋敷の入口）にツカを作り、その両側と後方に線香をあげる竹筒を立てる。ツカは三〇センチメートル四方で、高さ二〇センチメートル位の台形上に土又は砂を盛りあげ、茄子、胡瓜で作った牛馬をおき、花も供える。ツカには全面に階段状の段々を作ることもある。

事例⑮　平塚市岡崎[18]　家の門口に砂山とか富士山などという土の壇をつくる。砂山、富士山は、泥や砂でつくった三〇センチメートル四方くらいの土の壇である。

事例⑯　平塚市北金目[19]　午前中に家のジョウグチにツジをつくる。砂又は富士山の火山灰でつくる。竹で枠をつくり、四本の筒をたて、花（コウノハナ）をかざる。モリズナともいう。ツジの形は家によって少しちがうこともある。これには里芋の葉にアライアゲ（ナスを塞の目に切ったもの）をのせてあげる。

事例⑰　平塚市金目・真田[20]　盆山（砂盛りともいう9とはかどぐちに築く土壇のとで、だいたい三〇センチメートル四方、二〇センチメートル位の高さのもである。これは、畑の土手を掘ると宝永年間の富士山の噴火の時の黒い土砂が出るが、それで作るべきだとされている。しかし、わざわざ掘りに行くのは面倒なので川砂で作ってしまうことが多い。

事例⑱　平塚市土屋[21]　門口には砂盛りを設ける。砂盛りとは、富士山爆発時の黒い降灰か川砂をとってきて門口に築いた土壇（三〇センチメートル四方）のことで、周囲は竹で囲み、高さ三〇センチメートル位に二段にする家もある。砂盛りは香の花や線香を立てる。夕方、門口の砂盛りの所で迎え火を焚く。早く焚かないとオショロサン（先祖）が迷うといけないといい、まだ明るいうちに麦藁でパチパチ音がするように焚く。

事例⑲　秦野市東田原[22]　一三日、山に行き新のめ竹を切って辻をつくる。辻ができあがると麦わらをともして迎え火をたく。よるになると子ども達は線香を持って、それぞれの家の辻に線香をたててまわる。　一六日午後、辻をこわし、また家の中の盆だなをかたづけて、それを盆ゴザにくるんで川に流しに行く。辻をこわしたあとに線香をあげる。

事例⑳　秦野市八沢[23]　一三日になると子供達は今年出ため竹を沢山切り取って来る。このめ竹を四〇センチメートルほどの長さに五〇～六〇本切り、太めの竹を柱にして正方形に四本立てる。たてるた柱の中側に竹を井げたに組み上げながら十数段に積み、中にきれいな砂をいれる。それが一階になり、同形の小型のものをその上に作り二階にする。次に階段を作って完成となる。つじが出来上がると迎え火をたく。

事例㉑　秦野市横野宮上[24]　屋敷の入り口に一三日に作られる。四〇センチメートル位の長さに切った青竹を四本立てて、それに竹を交互に組んでいき、その中に富士山の噴火のときに降ったといわれる砂を入れて固め、前方に竹で階段状にのものを付けたものである。その平らな砂盛りの上には、里芋の葉にうどんをのせて供える。

事例㉒　中郡大磯町生沢[25]　迎え火をたく前に川の砂で富士を作り、蓮の葉を（今はさといもの葉）をのせ、その上になすを賽の目に切って置く。そこで火をたいて線香立を竹で作り線香をあげる。

事例㉓　足柄上郡中井町境[26]　八月一三日には、ジョーグチに川砂で「ツジ」を作る。ツジには、イモの葉にナスを細かく切ったものをのせて供えておく。迎え火はツジの所で行い、ムギカラを燃やす。線香をツジにあげてくる。線香は、近所のツジにもあげる。

事例㉔　足柄上郡山北町箒沢[27]　仏様のめじるしとなる迎え火を焚く所を庭（玄関前）につくり、夕方火をたく。今は川砂にて方墳や円墳につくるが、昔、竹でローソク立てを二本つくり庭の地面にさし、真中にやわらかめ線香を立てる所をつくる簡単なものだった。

事例㉕　足柄上郡山北町世附[28]　一三日の夕方、ジョウグチに川砂で円形に盛り上げ、外と内に階段をつけ、花を添え線香三本とローソク二本を砂の上に立て、マメガラで火を焚く。これを子供が作ったりする。

事例㉖　足柄上郡松田町宇津茂[29]　七月の一三日がむかえ盆で、この日の夕方、門口で迎え火がたかれる。迎え火をたくところに川砂で「オスナモリ」を築くのが普通である。

事例㉗　足柄上郡大井町山田[30]　川から砂を持って来て、四角に盛り上げ、前に階段をつくる。両側に花立と線香立をつくり、杉の葉や麦ワラを束ねて一三、一四、一五日まで毎晩たく。

事例㉘　鎌倉市山ノ内・台・梶原・常盤・津[31]　砂盛りは今も行っている。御先祖様は高いところが好きだからといって、浜砂または川砂をとってきて広さ三、四〇センチメートル四方、高さ一五センチメートルぐらいに盛り、階段をつけたり、たくさんの線香とオガラ

を五、六本立てる。ていねいな家ではそばに膳をおく。一三日の夕方オガラの迎え火をたき、鉦を鳴らして仏様を家へ案内する。

次に紹介する事例は、はたして砂盛りといえるかどうか、という問題を含んでいるが、砂盛りの類例として捉えられるのでないか。

事例㉙　逗子市小坪[32]　ムカエ火は数軒がかたまって辻の所で行うが、この時、浜からきれいな砂を取ってきて盛る。

事例㉚　三浦市南下浦町金田[33]　ごく数軒の家であったが、「メンボケ」といって無数の「お精霊」を玄関前にお迎えしているのを見た。これは玄関前というより屋敷の入口に当る所が適当であろう。そこに海の砂を敷き、それに「マコモ」の小さいむしろを敷き、里芋の葉をのせ、その上になすの細い目に切ったものをあげ、その先に細い短い竹で花立形の線香立と花立がさしてある。海で流仏を拾ったので、その精霊をこうして迎えているのだといった。

以上の二例は、さきに紹介してきた砂盛りの形態とは、確かに異なるが、考え方によっては、現在の砂盛りの原初形態を想像できるものではなかろうか。どちらかといえば、本来の砂盛りは、おそらく、このように単純な形態であったであろう。

次に、砂盛りを二つ作る地域の事例を紹介する。地域によっては、砂盛りを二ヶ所作って、ひとつは迎え火に、残りのひとつは送り火に使用している。

事例㉛　横浜市緑区元石川[34]　迎え火、送り火の砂もりは一つで兼ねる家が殆ど、二つ作る家は少ない。

事例㉜　横浜市緑区荏田町柚木[35]　夕方に迎え火をたく。家を出た道の端に砂（土）を一対四角に盛りあげ、線香をたてる。（中略）送り火は夜口時に近くに行なう。迎え火と同様に家の前に盛り砂のところで麦稈（今は稲）をバリバリもやす。キリアゲを供え、ミソハギの枝で水をちらしてから焼香し、「お粗末致しました。どうぞこの明りでお静かにお帰り下さい」などと云って火をもす。

事例㉝　横浜市神奈川区羽沢[36]　一三日にジョーグチにきれいな土を盛る。二つ作る。迎え火は早い方が仏様が喜ぶといって夕方五時頃に迎え火を焚く。迎え火はワラを燃やし、鉦をたたき、線香をあげ、竹の花立には花をさす、里芋の葉に茄子の刻んだものを盛り、ミソハギを束ね、水を振りかける。迎え火は家に近い方の土盛りでする。

事例㉞　横浜市旭区本村[37]　一三日が盆の入りで、ジョーグチにツヂを二つ作る。竹の花立も立てる。一三日の夕方、ツヂの所にワラを焚き、ミソハギで水を振る。迎え火という。

事例㉟　横浜市旭区善部[38]　門口とか、家の前の道に塚を二つ築き、それにオガラを立て、里芋の葉にナスを刻んだものをのせ、側にミソハギと水を置き、その前で迎え火をたく。ナス、キュウリの馬を置き、先祖を迎え、ナス、キュウリの馬を精霊棚にもっていく。精霊をお盆様ともいう。

事例㊱　横浜市瀬谷区宮沢[39]　門口に二つ砂盛りを作る。これを盆様という。オガラを立て、里芋の葉にナスを刻んだものをのせ、ミソハギ、水を供える。迎え火は手前の砂盛りの前で焚き、ナス・キュウリの馬を置き、終って家に入れる。

事例㊲　横浜市鶴見区獅子ヶ谷[40]　スナモリ。ツチモリ。一三日の午前中に作る。ジョウグチ（屋敷への入口）に二つ並べて作る。土は家のまわりものを使う。スナモリの前には墓の前に立てたものと同じように、竹でつくった花立てを立てる。二つ作るのも迎え火用と送り火用である。

事例㊳　藤沢市遠藤[41]　ジョウグチの前に、高さ四、五寸、一尺四方ぐらいに土を平らにならして盛ったツカというものを作る。三方はおがらのクネをめぐらし、階段などつけて、家々でそれぞれくふうされている。ツカは普通は一つ作るが、たまにお迎えのツカと、送るツカとていねいに二つ作る家もあるそうである。一三日の夕方、アライアゲ（なすやきゅうりを刻み、水で一度洗ったもの）を持って、墓まいりをすませ、ジョウグチのツカにもアライアゲやみそはぎを供え、きゅうり、なすの馬と牛は墓の方に向けて供え、麦がらまたはワラを燃して、「この火でおいで下さい」と言って、佛様をお迎えして、ツカの所で背負うようにして縁から家に上り、馬や牛もツカから盆棚にうつしてかざる。

事例㊴　藤沢市大庭[42]　カエド（常口）に土で男がスナモリを作り、墓に仏様を迎えに行く。スナモリは一つの家と二つの家があり、又形も長方形、正方形の家とまちまちである。（中略）又同時にスナモリの上にオガラを、これを杖にして来る様にと立て、火をたき、線香をたく。これは女がする。

最後に、海岸近くで作られる砂盛りには貝などを周りにつけるといわれていたが、今までその事例が報告されていなかったので、ここに一例ではあるが紹介する。

事例㊵　横浜市中区本牧[43]　七月一二日にボンヤマといって、家の入口附近に砂盛りを作る。砂は海からとってきて、大きさが三〇センチメートル四方、高さ二〇センチメートルの砂盛りを作る。ボンヤマの頂きに巻貝をのせ、その他の部分をサルボウの貝や赤貝で覆った。砂が風に飛ばされないように貝を置いたという。このボンヤマ

のそばで鉦を叩きながら迎え火を焚く。

以上、砂盛りの事例を四〇例紹介してきたが、現在、八六ヶ所で砂盛り習俗の存在が確認されている。近年は、砂盛り習俗の存在が周知され、このテーマに興味を持たれてきたので、計画的に調査されるようになってきた。ところが、砂盛りの報告が増えてきているにも関わらず、残念ながらその調査内容が決して十分とはいえない。そこで、今後は現地で盆行事を含めた悉階調査を丹念に実施し、詳細なデータを収集すべきである。同時に、砂盛りの形態には地域によって明らかに差異が認められ、さらに問い詰めれば各家によっても違うので厳密にいえば全く同じ形態は存在しないことになる。したがって、今後は砂盛り自身の写真や実測図も必要になってくるだろう。

三、若干の考察

ここでは、神奈川県下の砂盛り習俗について、紹介した事例と筆者の調査をもとにして若干の考察を試みたい。

砂盛りの習俗は県下に広く分布しているが、浄土真宗の檀家である家では作られていないようである。例えば、大和市上草柳では、市内の各地で砂盛りが作られているにも関わらず、作っていない地域がわかったので調査したところ、作っていない家は浄土真宗（善徳寺）の檀家であることがわかった。このような例外もあるが、横浜市の南部や県北部の津久井郡一帯および三浦半島では作られていない。したがって、砂盛りの習俗は概ね県内を東西に帯状のように濃厚に分布しているといえよう。

県外では、小林氏[44]によって伊豆、御殿場、三島から吉原、清水、静岡、島田を経て、掛川付近まであることが確認されている。

その他にも東京都町田市鶴間[45]、埼玉県加須市[46]にもみられ、また岐阜県恵那郡山岡町では八月一三日に「門口の所に石の台を作って、松明を迎え火としてともした」という類例がみられる。さらに、滋賀県大津市下坂本[48]でも、地蔵盆の時にいわゆる砂盛りをつくることが知られているし、熊本県阿蘇郡宮地町[49]にもセンコウヤマともスナヤマといわれるものがあった。いずれにしても、砂盛りの習俗は静岡県の御殿場付近を除くとほとんど類例しかみられず、とりわけ神奈川県下には濃厚に分布しているので、県下を代表する習俗のひとつといえよう。

現在、県下では砂盛りをつくっている地域として八六ケ所が確認されているが、そのうちスナモリが二八、ツジが一一、ツカが一〇の地域でそれぞれ呼ばれている。その他に、モリスナ、モリッチ、ダイ、ドダン、オボンサマ、ボンヤマ、スナヤマ、フジサンとも呼ばれいるが、明らかに呼び方がない地域が二一ケ所もある。ただし、スナモリという呼称は本当に昔から呼ばれているものだけなのか注

意をはらう必要があろう。

さて、ツジ以外の呼び方には砂盛りの形に由来していることが推測できるが、ツジという呼び方はどこから来ているのだろうか。おそらくは道端の意から来ているのではなかろうか。ツジという呼称は秦野市内およびその周辺地域にみられ、しかも秦野市内でみられるツジの形態は、新竹で井型に組み立てた中に砂や土などを詰めているので、他の地域とは形態も明らかに異なっている。このあたりにもなんらかの関連があるのかもしれない。

いずれにしても、砂盛りの呼称はスナモリ、ツジ、ツカが一般的である。なお、その分布状況については、『神奈川県民俗分布地図』[58]を参照してほしい。

砂盛りは、一般的には砂や土などを用いて四角錐のような形に盛って固めて作っている。そこに、階段がを設けられていたり、線香立てや花立て用の竹筒が挿されているのが基本的な形態である。地域や家々によってある程度の差異がみられるが、前述した秦野市の例と形態を比較すると明らかに大きな違いがみられる。

近年は、コンクリート製の砂盛りや菓子箱などに砂などを入れて、そこに線香や麻幹などを立てたりして、砂盛りの代用にしているのが目につくようになってきた。明らかに、伝承してきた地域が都市化の波におおわれて、道路がコンクリートとなり、泥だらけになるような砂盛りを設ける場所が減少してきていることにも由来している。また、代用の砂盛りは、毎年、繰り返して使用している。

さて、これらの砂盛りの大部分は、ジョウグチ（屋敷口）に一つが作られるが、横浜市や藤沢市では二つが作られる所があり、一つが迎え火、もう一つが送り火に使われている。二つ作っている地域では、木箱の中に土砂をいれた代用品の中央に小さな溝で境界をつくり二つに分離させている。あるいは、砂盛りを一つ作って、同じように上部に溝をつくって二つにしている。

材料となる砂や土には、川の砂、海の砂、畑の土、富士山の火山灰などが用いられている。横浜市中区本牧の旧漁村では、盛った砂の頂上にを巻貝を立て、周囲には赤貝などの貝で覆っている。

盆行事が終わると、この砂盛りを壊して川などへ流す地域もあるが、大部分の地域が壊れるのを自然にまかせている。最近では、前述したように代用品などを利用しているので、毎年、更新する必要がなくなってしまっている。

おわりに

以上、砂盛りについての概要等を言及してきたが、最後に、なんのために砂盛りをつくるのかという点について考えてみたい。

県内では、砂盛りをなんのためにつくるのかといった点に関しては、すでに現況の調査では納得できるような資料を得られないが、静岡県御殿場市内に入ると無縁仏を祭祀する場所であると明確に伝

承されている。ところが、県下では無縁仏の供物を屋内の盆棚の下に供えていていることからもうかがえるように、無縁仏を屋外で祭祀する風がほとんどみられない。

かりに、静岡県御殿場市でいわれているように、無縁仏は屋内より屋外で祭る方がふさわしいという前提に立つならば、砂盛りは無縁仏を屋内で祭る以前の屋外の祭場であったと考えることも可能であろう。

しかし、盆棚に供える胡瓜と茄子の牛馬、ミソハギなどと同じ供物を砂盛りに供え、とくに牛馬は迎え火を焚くと砂盛りから家の中の盆棚に運ぶ家も少なくない。あるいは、その時に「さあ、お迎えにまいりました。私の背中にお乗りください」[51]といって背負うような格好をして家の中に入る事例もみられる。

つまり、このことは先祖の霊を迎える祭場が古くは屋外にあったことを表示しているのではなかろうか。むしろ、静岡県御殿場市にみられる砂盛りは、本県でみられるものとは性格が異なるものであると考えておいた方が適切ではなかろうか。

すなわち、現段階では県下の砂盛りは祖霊の祭場であり、静岡県のそれは無縁仏の祭場であるとは考えておくことが妥当ではなかろうか。大島建彦氏[52]が、「盆の砂もりというのも、もともと無縁仏を祭るために始められたのが、しだいに先祖を迎えるように解されたものといえよう」と指摘しているが、現状では砂盛りがまだ無縁仏の祭場から、祖霊の祭場へと変遷したと考えるには、まだまだ根拠となるべき資料が乏しいといえよう。

［注］

(1) 小林梅次、一九五六、「相模のツジと盆柱」、神奈川県文化財協会『かながわ文化財』第五号、四ー六頁。
(2) 小林梅次、一九六四、「盆行事の研究」、藤沢市教育文化研究所『藤沢民俗文化』第一号、一六ー二二頁。
(3) 田中宣一、一九七七、「年中行事」、神奈川県『神奈川県史民俗編』、六五八ー六六二頁。
(4) 神奈川県立博物館編、『神奈川県民俗分布地図』の調査カード（神奈川県立博物館所蔵）。以降、『民俗地図』カードとする。
(5) 郷土誌橘刊行会編、一九七九、『郷土誌　橘』、二二二頁。
(6) 相模原市教育委員会編、一九八一、『年中行事調査報告書』、六二頁。
(7) 筆者調査。
(8) 筆者調査。
(9) 座間市史編さん係編、一九八〇、『座間の語り伝えー年中行事編ー』、四三ー四四頁。
(10) 『民俗地図』カード。
(11) 『民俗地図』カード。
(12) 田中宣一、一九七一、「打戻の年中行事」、藤沢市教育文化研究所『藤沢民俗文化』第七号、三八頁。
(13) 武蔵大学社会人類学研究会編、一九八一、『茅ヶ崎市堤の民俗』、四七頁。
(14) 茅ヶ崎市文化資料館編、一九七九、『柳島生活誌』、一五〇頁。
(15) 『民俗地図』カード。
(16) 『民俗地図』カード。
(17) 『民俗地図』カード。
(18) 『民俗地図』カード。

(19)『民俗地図』カード。
(20)平塚市史編さん室編、一九八四、『平塚市史民俗調査報告書』第四集、一二三頁。
(21)平塚市史編さん室編、一九八三、『平塚市史民俗調査報告書』第三集、一一一頁。
(22)『民俗地図』カード。
(23)神奈川県教育委員会編、『中地区民俗資料調査』、一一七頁。(24)立正大学民俗学研究会編、一九八四、『秦野盆地周辺の民俗』、六九頁。
(25)大磯町教育委員会編、一九八〇、『大磯町生沢地区民俗資料調査報告書』、二五頁。
(26)『民俗地図』カード。
(27)神奈川県教育委員会編、一九七一、『足柄地区民俗資料調査報告書(I)』、一二一頁。
(28)瀬戸貞夫著、一九七七、『西丹沢の民俗I』、神奈川県教育委員会、一二二頁。
(29)神奈川県教育委員会編、一九七一、『足柄地区民俗資料調査報告書(I)』、四三頁。
(30)『民俗地図』カード。
(31)大藤ゆき著、一九七七、『鎌倉の民俗』、かまくら春秋社、三二一―三二二頁。
(32)逗子市教育委員会編、一九八一、『逗子市文化財調査報告書』第一〇集(民俗)、九五頁。
(33)神奈川県教育委員会編、一九七〇、『東京外湾漁撈習俗調査報告書』、一九八頁。
(34)『民俗地図』カード。
(35)横浜市教育委員会編、一九七二、『港北ニュータウン地域内文化財調査報告書』、一〇一―一〇二頁。
(36)『民俗地図』カード。
(37)『民俗地図』カード。
(38)『民俗地図』カード。
(39)『民俗地図』カード。
(40)長田平・鈴木通大、一九九〇、「獅子ヶ谷の農耕と年中行事」、神奈川県立博物館編『農耕習俗と農具―昼間家日記を中心に―』、一六七頁。
(41)丸山久子編、一九六一、『遠藤民俗聞書』、藤沢市教育委員会、四〇頁。
(42)土肥雅枝・内山清美、一九七六、「大庭地区の民俗」、藤沢市教育文化研究所『藤沢民俗文化』第七号、二九頁。
(43)倉林夕美氏のご教示により、筆者調査。
(44)小林、「盆行事の研究」、一六頁。
(45)畠山　豊氏のご教示による。
(46)『加須市史　民俗編』、一九八一、一〇四九頁。墓塚と称している。
(47)中京大学郷土研究会編、一九七九、『中京民俗』第一六号(山岡町乃民俗)、七九頁。
(48)大島建彦、一九七七、「地蔵盆の砂山」、『西郊民俗』第七九号、一三頁。
(49)八木三二、一九三三、「肥後国阿蘇郡民間行事に関連しての俗信」、『郷土研究』第七巻第三号、一三頁。
(50)神奈川県立博物館編、一九八四、『神奈川県民俗分布地図』、五〇頁。砂盛りの項を参照。
(51)川崎市教育文化研究所編、一九七一、『いなだ子ども風土記その三　年中行事編』、一三三頁、および川崎市幸区南加瀬の筆者調査。
(52)大島建彦、一九七七、「神奈川の民俗」、『神奈川県史研究』第三三号、四五―四六頁。